

上月隈遺跡群 2

—第2次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第633集

2000

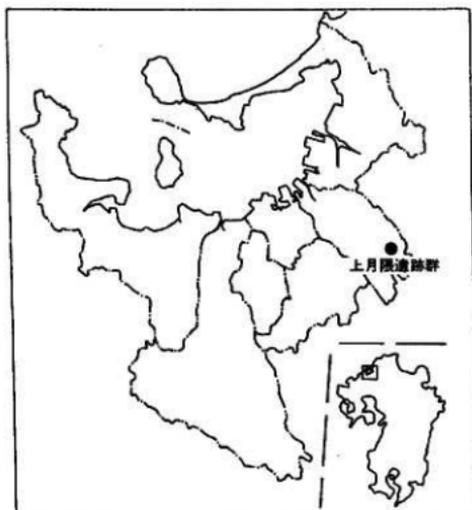
福岡市教育委員会

KAMI TSUKI GUMA

上月隈遺跡群 2

—第2次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第633集



遺跡略号 調査番号
KTG-2 9805

2000

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの義務であり、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていくこともまた事実であり、本市教育委員会では事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

本書は公園建設に伴い調査を実施した上月隈遺跡群第2次調査の成果を報告するものです。今回の調査では弥生時代から中世にかけての集落の跡を検出するとともに、多数の上器や輸入陶磁器が出土しました。これらは当時の月隈地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、ご協力を賜りました福岡市経済振興局・都市整備局をはじめとする関係者の方々に対し、心から謝意を表します。

平成 12 年 3 月 31 日

福岡市教育委員会
教育長 西 憲一郎

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が公園建設に伴い、福岡市博多区大字下川隈709-1他地内において発掘調査を実施した上川隈遺跡群第2次調査の報告書である。
2. 本書で報告する調査の細目は以下のとおりである。

調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間
9805	KTG-2	1,041m ²	1998.4.15～7.8

3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は榎本義嗣が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は榎本、小川光彦（琉球大学大学院生）が行った。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は榎本が行った。
6. 本書に掲載した挿図の製図は阿部泰之、榎本が行った。
7. 本書で用いた方位は磁北で、真北より6°40'西偏する。
8. 遺構の呼称は掘立柱建物をSB、堅穴住居をSC、土坑をSK、溝をSD、ピットをSP、その他の遺構をSXと略号化した。
9. 本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
10. 本書の執筆および編集は榎本が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	6
1. 調査の概要	6
2. 遺構と遺物	6
1) 掘立柱建物(SB)	6
2) 竪穴住居(SC)	6
3) 土坑(SK)	14
4) 溝(SD)	20
5) その他の遺構(SX)	24
6) その他の遺物	27
IV. 結語	27

挿 図 目 次

第1図	上月隈遺跡群位置図(1/25,000)	3
第2図	上月隈遺跡群周辺地形図(1/5,000)	4
第3図	上月隈遺跡群周辺地形図(昭和初期頃)(1/5,000)	4
第4図	第2次調査区位置図(1/1,000)	5
第5図	SB 038 実測図(1/60)および出土遺物実測図(1/3)	7
第6図	SC 005 実測図(1/30,1/60)	8
第7図	SC 006・007・008 実測図(1/40,1/60)	9
第8図	SC 005・006・007 出土遺物実測図(1/3)	9
第9図	SC 010 実測図(1/60)	10
第10図	SC 010 出土遺物実測図(1)(1/3)	11
第11図	SC 010(2)・032 出土遺物実測図(1/1,1/3)	12
第12図	SC 013・014・032・039 実測図(1/60)	13
第13図	SK 019・020・022・024・025 実測図(1/40)	15
第14図	SK 019 出土遺物実測図(1)(1/3)	16
第15図	SK 019 出土遺物実測図(2)(1/3)	17
第16図	SK 019 出土遺物実測図(3)(1/2)	18
第17図	SK 020・025・033 出土遺物実測図(1/3)	18
第18図	SK 027・028・033・035・155 実測図(1/40)	19

第19図	S D 001・002・004・012・017・030 実測図(1/40、1/80)	21
第20図	S D 001 出土遺物実測図(1/3、1/4)	22
第21図	S D 002・017・030 出土遺物実測図(1/3)	23
第22図	S X 036 実測図(1/20)および出土遺物実測図(1/3)	25
第23図	ピット・検出面出土遺物実測図(1/3)	26

図 版 目 次

図版 1	(1)調査区全景(西から)	(2)調査区東半部全景(西から)
図版 2	(1)調査区西半部全景(東から)	(2)調査区西端部全景(東から)
図版 3	(1)S B 038(南から)	(2)S C 005・006・007・008(南から)
	(3)S C 005 カマド検出状況(北から)	(4)S C 006—P 3 土層(西から)
	(5)S C 010(南から)	(6)S C 032(南から)
図版 4	(1)S K 019(西から)	(2)S K 020(西から)
	(3)S K 035(東から)	(4)S D 001 土層(1)(西から)
	(5)S D 001 土層(2)(東から)	(6)S X 036(北から)

付 図

上月隈遺跡群第2次調査区全体図(1/200)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市都市整備局公園緑地部公園建設課長より1996(平成8)年8月30日付、都整第1119号により同市教育委員会文化財部埋蔵文化財課長宛てに博多区大字上月隈、大字下月隈地内における月隈緑地(月隈パークゴルフ場)整備事業(事業面積:21,000㎡)に伴う埋蔵文化財事前審査についての依頼が行われた(事前審査番号:8-1-599)。これを受けて埋蔵文化財課では事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地である上月隈遺跡群に含まれていることから同年12月17・18日に試掘調査を行った結果、事業地北側の丘陵緩斜面上において遺構を確認した。この結果をもとに翌年度から両者で事業内容を考慮した上で、埋蔵文化財保存を前提とした造成計画についての協議を行ったが、盛土造成による遺構面の保存可能な箇所があるものの、造成計画上切土により遺構の破壊が回避できない箇所が発生したためその1,200㎡を対象とした本調査を1998年4月15日より、また翌年度に資料整理・調査報告書作成を行うこととなった。なお、これらに係る費用は事業主体である同市経済振興局空港対策部空港対策課が負担した。

2. 調査の組織

調査委託:福岡市経済振興局空港対策部空港対策課

調査主体:福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括:埋蔵文化財課長 柳田純孝(前任) 山崎純男(現任)

同課調査第2係長 山口謙治(前任) 力武卓治(現任)

調査庶務:文化財整備課 谷口真由美

事前審査:同課事前審査係長 田中壽夫

同係主任文化財主事 杉山富雄

同課第1係文化財主事 榎本義嗣(前任) 事前審査係文化財主事 中村啓太郎(現任)

調査担当:同課調査第2係文化財主事 榎本義嗣

調査作業:一ノ瀬周三郎 岩佐亘 岩崎良隆 大賀・小川秀雄 金子國雄 熊本義徳
小林義徳 坂田武 渋谷博之 関哲也 長田嘉造 永松好伸 宮崎雅秀 山内恵
吉峰勲 米倉國弘 石橋テル子 江越初代 金子澄子 唐島栄子 酒井康恵
杉村百合子 岡加代子 曾根崎昭子 辻美佐江 永松伊都子 永松トミ子

整理作業:西島信枝 松尾真澄

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで都市整備局、経済振興局をはじめとして関係者の皆様には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

II. 遺跡の立地と環境

玄界灘に北面し、背後に背振・三郡山系をひかえる福岡市には、これらより派生する山塊、丘陵によって画される中小の平野が展開しており、東側から粕屋、福岡、早良、今宿平野と呼称される。いずれの各平野も古くから独自の歴史的、地理的環境を有している。

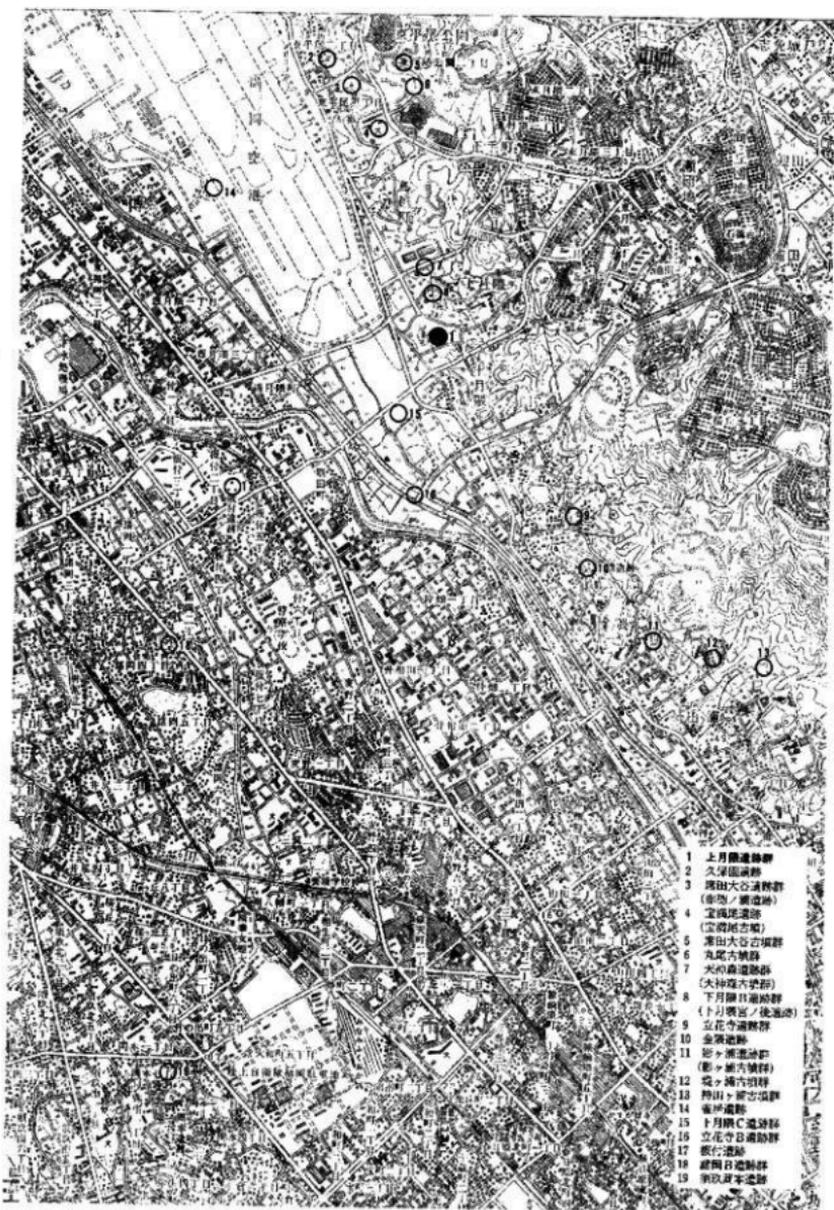
今回報告する上月隈遺跡群の位置する福岡平野の西側には背振山系に属する油山(標高:597 m)から北側に発達する丘陵が派生し、早良平野と画される。また、東側には三郡山地より派生した大城山(標高:410 m)の山麓から北西方向に月隈丘陵が延びて、粕屋平野との境界をなしている。両丘陵間には御笠川、那珂川が博多湾へと北流し、沖積地が形成されるが、平野内には洪積台地が点在している。本遺跡群は先述した月隈丘陵から西側へ多数派生する舌状の支丘の一つに占地している。該地周辺は市街地化や土取りにより地形の改変が進むが、第3図に示す旧地形図に拠ると、西側へ派生する支丘は端部で尾根線の向きを変え、北西方向へ延びて、沖積地へと至る。また、東側には鞍部が形成され、独立丘陵状を呈している。

この月隈丘陵の同様の地形上には多数の遺跡が知られており、本遺跡群の周辺について概述すると、旧石器時代、縄文時代については遺物が散見される程度であるが、弥生時代になって初めて本格的な生活跡が看取される。天神森遺跡群では前期前半から後半にかけての木棺墓と甕棺墓からなる墓地が丘陵端部において確認されている。また、中期から後期にかけては墓地が増加し、同遺跡の他、本遺跡群(第1次および第3次)、下月隈B遺跡群(下月隈宮ノ後遺跡)、宝満尾遺跡、金隈遺跡等で甕棺墓、土壊墓からなる墓域が形成される。宝満尾遺跡では後期前半の上壊墓に異体字銘帯鏡1面が副葬される。また、本遺跡群の第3次調査では中期後半の甕棺墓から中細形銅剣、ガラス管玉が出土している。金隈遺跡は前期後半から後期に至る該地においての最大規模の共同墓地で、甕棺墓348基、土壊墓119基他が検出され、国史跡に指定されている。生活遺構としては前期の貯蔵穴が影ヶ浦遺跡群、宝満尾遺跡で検出されている。墓地同様に中期から後期にかけては遺構の増加が目立つ。本遺跡群(本報告第2次)、久保園遺跡、席田大谷遺跡群、中尾遺跡群、赤穂ノ浦遺跡等が挙げられ、竪穴住居の他に中期後半に比定される5×8間の大形掘立柱建物が久保園遺跡で検出されている。該地における拠点的な集落であったと考えられる。また、赤穂ノ浦遺跡出土の横帯文銅鐻型や席田大谷遺跡群出土の石製銅戈鋳型模造品は青銅器生産に関する集団の存在を唆するものであろう。

古墳時代では竪穴住居が散見されるが、墓地としての利用が主体を占め、5世紀から6世紀にかけて宝満尾古墳、天神森古墳群、丸尾古墳群、席田大谷古墳群等、尾根上に1~数基の小群からなる古墳が造営される。なお、丘陵南側では堤ヶ浦古墳群、持田ヶ浦古墳、影ヶ浦古墳群の大規模な後期群集墳が形成されている。

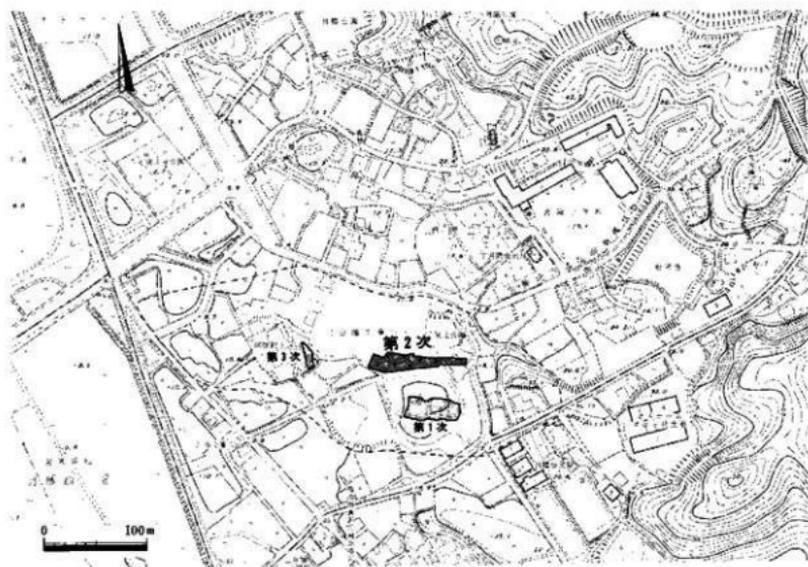
古代から中世にかけての遺構は少数であるが、立花寺遺跡群では古代の倉庫群の他、初期輸入磁器や瓦が出土しており、官衙の可能性を有する。天神森遺跡群では支丘間の谷部を利用して、14世紀から15世紀にかけての集落が営まれる。また、久保園遺跡の丘陵上では11世紀後半から12世紀後半の埋葬遺構が検出されている。

なお、これら月隈丘陵の西側に面する沖積地においては雀居遺跡、下月隈C遺跡群、立花寺B遺跡群等で、調査および整理作業が進行しており、沖積微高地上に営まれた弥生時代から中世の集落や低地を利用した水田遺構の様相が明確になりつつある。今後は丘陵部および沖積地それぞれに展開する遺跡群相互の関連性も考慮する必要がある。

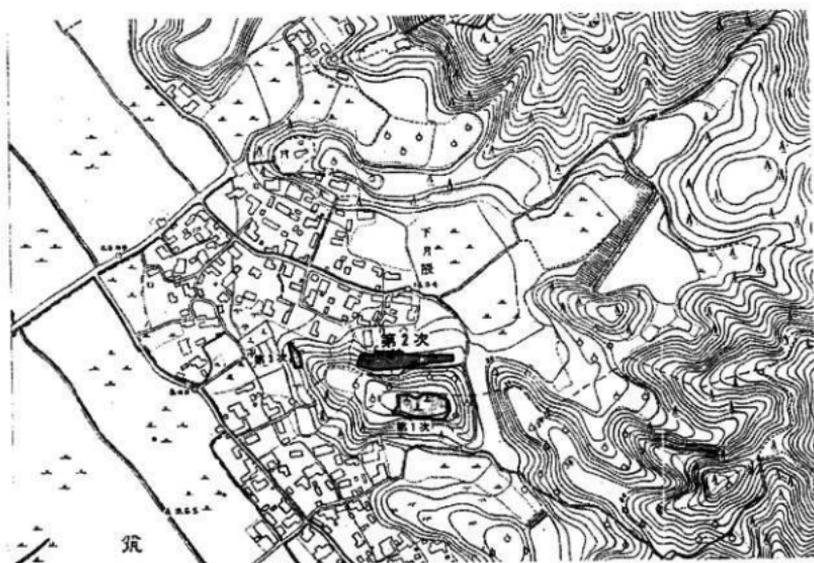


- 1 上月遺跡群
- 2 大谷遺跡群
- 3 深田大谷遺跡群 (車馬ノ塚遺跡)
- 4 宝篋塚遺跡
- 5 深田大谷古墳群
- 6 丸尾古墳群
- 7 大谷遺跡群 (大谷塚古墳群)
- 8 下月跡日遺跡群 (上月塚区ノ後遺跡)
- 9 立花寺遺跡群
- 10 金塚遺跡
- 11 影ノ塚遺跡群
- 12 影ノ塚古墳群
- 13 影ノ塚古墳群
- 14 影ノ塚遺跡
- 15 上月跡C遺跡群
- 16 立花寺日遺跡群
- 17 影ノ塚遺跡
- 18 影ノ塚遺跡群
- 19 影ノ塚遺跡

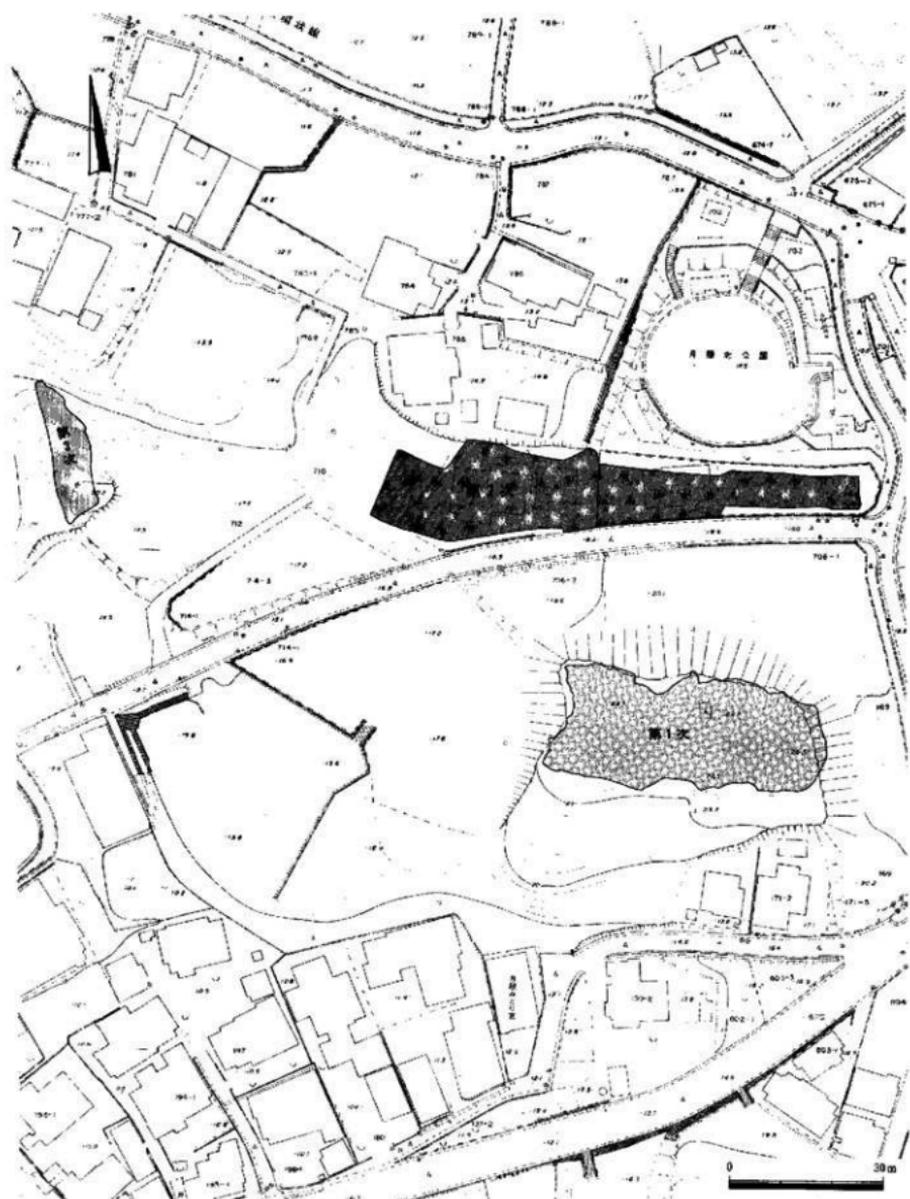
第1圖 上月遺跡群位置圖(1/25,000)



第2図 上月限遺跡群周辺地形図(1/5,000)



第3図 上月限遺跡群周辺地形図(昭和初期頃)(1/5,000)



第4图 第2次調査区位置图(1/1,000)

Ⅲ. 調査の記録

1. 調査の概要

上川隈遺跡群第2次調査区は博多区大字下月隈709-1他に所在し、調査前の現況は調査区中央から東側は宅地、西側は竹林であった。前章でも述べたが、遺跡群の占地する支丘は東側に鞍部を有し、独立丘陵状を呈している。この尾根線の最高所では第1次調査、尾根線西側端部では第3次調査が実施され、弥生時代および近世の墓地为主体とする遺構が確認されている。この丘陵も含めた周辺は土取り等により地形の改変が進むが、第3回の旧地形図から看取される様に本調査区は丘陵北側緩斜面に位置し、調査区の北側には浅い谷が開析する。遺構は調査区南側では表上、客土を除去した花崗岩風化上上で、北側ではその上層に堆積する黄褐色粘質土上で検出した。なお、谷部の基盤となる黄褐色粘質土の上層には暗褐色粘質土の包含層が認められた。遺構面の標高は丘陵尾根側で約19m、谷側で約16.7mを測る。今回検出した主な遺構は弥生時代中期から後期の堅穴住居・土坑・溝、古代の掘立柱建物・堅穴住居・土坑・瓦器焼成窯、中世の土坑・溝等である。

調査は1998(平成10)年4月15日より重機による表上剥ぎ取りを行い、機械作業の終了後の同月21日から人力による作業を開始した。遺構検出作業後、東側から遺構掘削に着手し、順次西側に調査を進めた。ほぼ掘削の終了した6月30日に全景写真の撮影を行った。記録類の作成後の7月8日に器材を撤収して調査は完了した。「I. - 1. 調査に至る経緯」で前述した様に1,200㎡を調査対象としたが、周囲の安全対策や法面確保のため、実際の調査実施面積は1,041㎡である。

調査時の遺構番号は001からの3桁の通し番号を遺構の種類に関わらず付した。その番号は欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっては原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。また、調査区内での遺構位置を本文中で示す際には調査時の座標軸を基準とした10m単位での英字と数字によるグリッド表記(付図参照)を用いる。

2. 遺構と遺物

1) 掘立柱建物(SB)

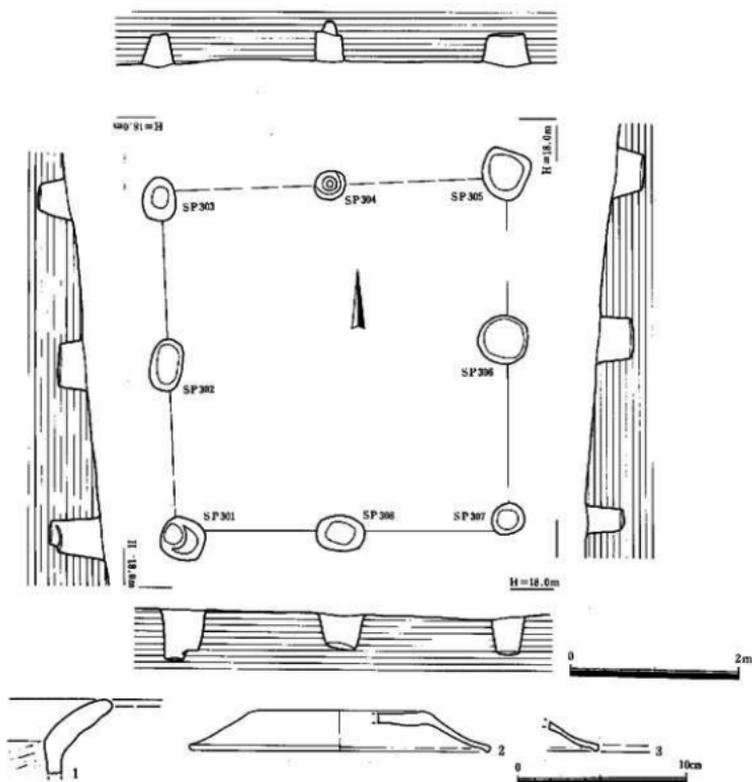
今回報告する建物は8世紀代に比定される1棟である。調査区の西側ではピットが部分的に集中するが、建物としてはまとめきれなかった。

SB 038(第5図) A-4区で確認した2間×2間の掘立柱建物で、先述した北側に開く浅い谷部の頭に位置している。建物方位はほぼ磁北に一致する。桁行、梁間共に全長は4.2m、柱間は全て2.1mを測る。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、径35~60cm、深さ30~60cmを測る。柱穴の覆土は暗褐色土である。柱痕跡は確認できなかった。なお、SP 308はSD 040を切る。

出土遺物(第5図1~3) 1はSP 306から出土した土師器製の口縁部片である。「く」字状に折れる直線的な口縁部を有する。頸部下内面にはヘラ削りを施す。2・3は須恵器の坏蓋である。2はSP 306およびSP 307出土の接合資料で、つまみを欠失している。口縁端部は短く折り曲げ、天井部外面に回転ヘラ削りを施す他はヨコナデを加える。口径は17.5cmを測る。3はSP 305出土で、2とは同一個体の可能性が高い。他にSP 302を除く各柱穴から遺物が出土しているが、土師器・須恵器の細片が少量と鉄滓が1点にとどまる。以上の出土遺物から8世紀前半の建物と考えられる。

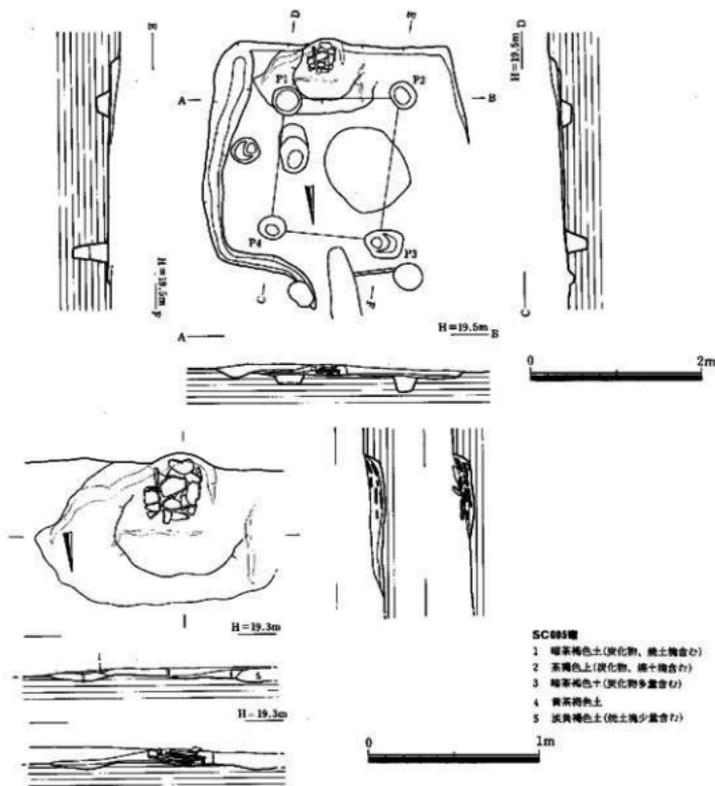
2) 堅穴住居(SC)

計9軒を確認した。時期的には弥生時代後期3軒、古墳時代1軒、奈良時代1軒であるが、4軒は出土遺物希少により時期不詳である。また、調査区東部では5軒が重複して位置する。



第5図 SB 038 実測図(1/60)および出土遺物実測図(1/3)

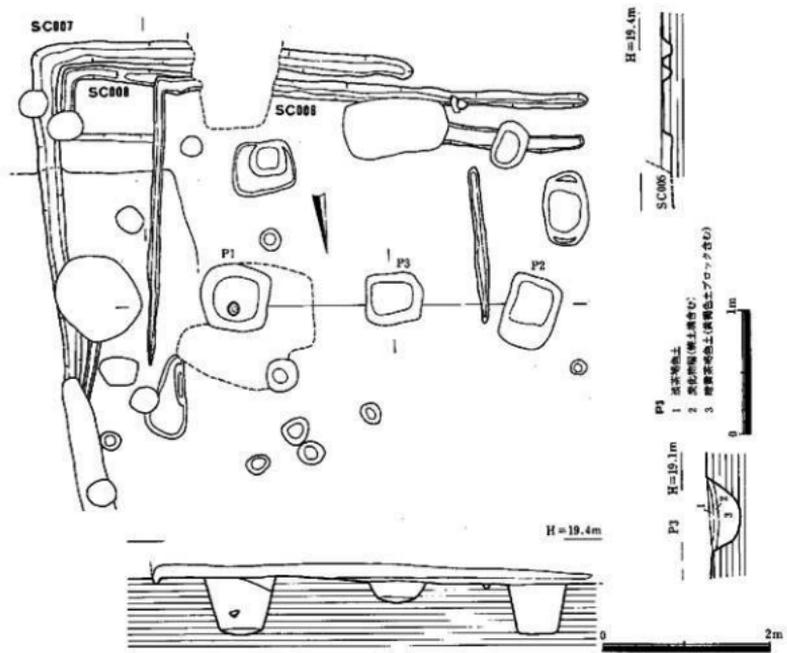
SC 005(第6図) A-8区で検出した小形長方形プランの竪穴住居で、東西長約3m、南北長約2.7mを測る。削平により壁面は南側で10cm遺存する程度で、北側では床面が露出している。壁面の東側と北東側には幅10~40cm、床面からの深さ5~10cmの壁溝が設けられる。北東壁際の壁溝端部は湾曲して北側に折れる。覆土は茶褐色土である。主柱穴はP1~P4の4本で、柱間は東西方向が1.3、1.4m、南北が1.6、1.7mである。柱穴は円形で、径30~40cm、深さ15~40cmを測り、P4のみが深めに掘り込まれる。また、南側壁面の中央には竈が設置される。検出時には焼土塊、炭化物泥じりの暗茶褐色土が径約1~1.5mの範囲に検出されたため、直交方向の土層ベルトを残して掘下げを進めた。焼成部の3層では、器面の風化により全ては接合できなかったが、同一個体であると考えられる上部器壺(第8図4)が破砕された状態で出土した。なお、底部片は確認できなかった。土層観察では2・5層が竈袖基部と考えられるが、壁体の大半は流出している。袖部を除去すると深さ5cm程度の浅い窪みが確認された。



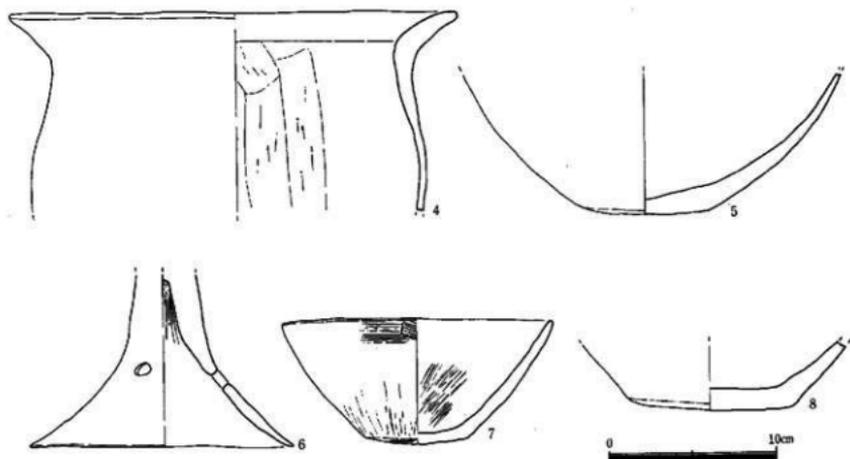
第6図 SC 005 実測図(1/30, 1/60)

出土遺物(第8図4) 前述した甕出土の土師器甕で、復元径は25.6cmを測る。「く」字状に折れる口縁部を有し、胴部は緩く張る。器面の風化が著しいが、内面には縦もしくは斜方向のヘラ削りが残る。胎土には砂粒が多量に混じる。この土師器から8世紀代の遺構と考えられる。なお、出土遺物は少量で、他には土師器の細片が少量のみである。

SC 006(第7図) A-7・8区で確認した方形プランの竪穴住居である。SC 005に切られ、SC 008を切る。SC 005同様に削平が著しく、南側および東側の壁溝が「L」字状に遺存するのみである。壁溝は幅10～20cm、床面からの深さは10cmを測る。なお、壁面は南側で僅かに確認できた。復元で1辺は5～6mを測るものと推定される。主柱穴はP1・P2の東西方向の2本と考えられ、柱間は3.5mを測る。柱穴は1辺約60～80cmの隅丸方形を呈し、深さはP1が70cm、P2が60cmである。両柱穴のほぼ中央部床面では炉と考えられるP3を検出した。柱穴同様に隅丸方形を呈し、1辺約60cm、深さ30cmを測る。焼上塊を含む炭化物層の堆積が確認できた。



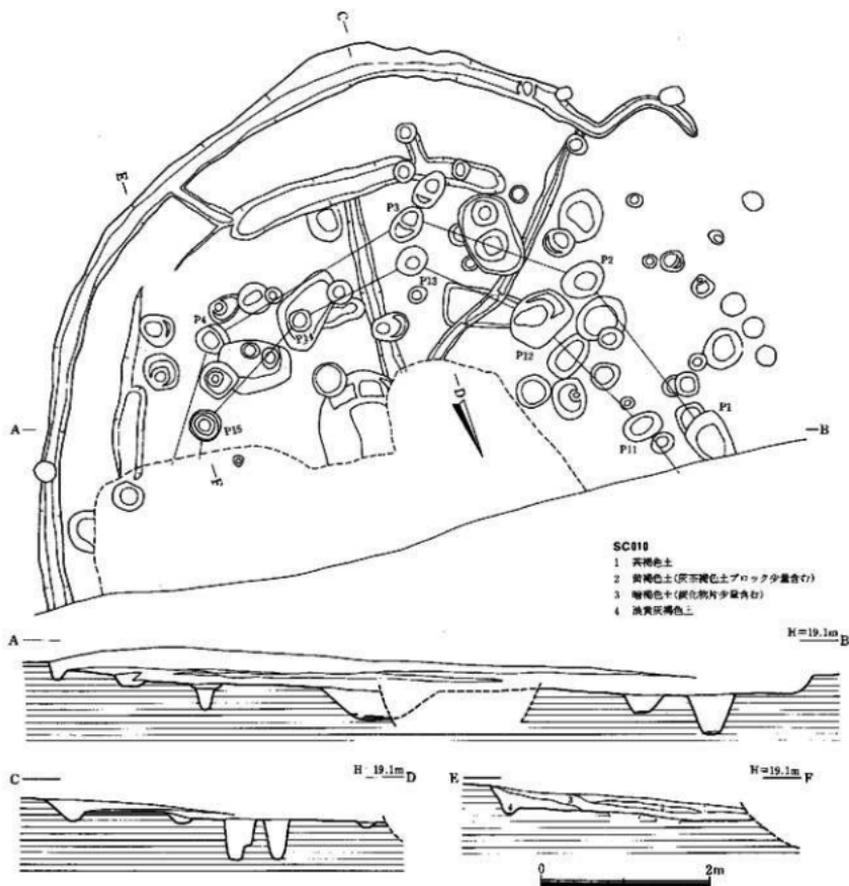
第7图 SC 006·007·008 平面图(1/40、1/60)



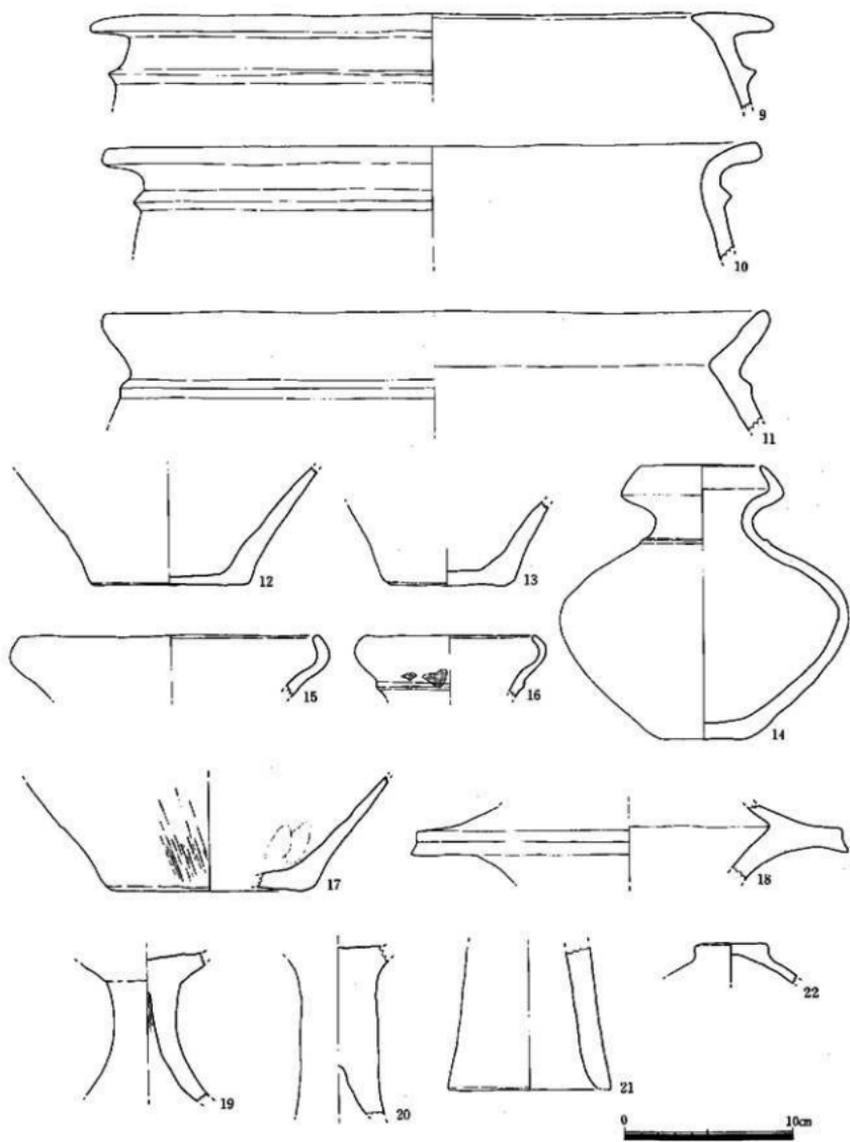
第8图 SC 005·006·007 出土物实图(1/3)

出土遺物(第8図5~7) いずれも弥生土器である。5は南側の壁溝から出土した壺の底部である。凸レンズ状の底部を有し、体部へは外湾気味に移行する。内外面共に器面の風化がすすむ。6・7は主柱穴であるP1から出土したものである。6は高坏の脚部で、中位に凸形の透しを3孔有する。内面上半にはシボリ痕が残る。7はほぼ完形の鉢で、5同様に凸レンズ状の底部を有する。外面は口縁部および底部に刷毛目、体部にはヘラナデを施し、内面は体部に粗い刷毛目を残す。口径15.8cm、器高7.5cmを測る。これらの出土遺物から弥生時代後期中頃の遺構と考えられる。他に弥生土器の細片が少量出土している。

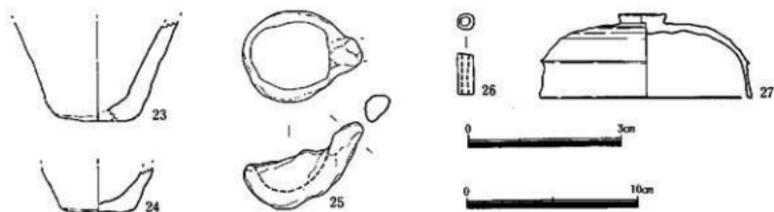
SC 007(第7図) A・B-8、B-7区に位置する方形プランの住居である。SC 006とは重複するが、壁面の削平により、壁溝同士の切り合いがなく、前後関係は不明である。SC 006と同じく南



第9図 SC 010 実測図(1/60)



第10图 SC 010出土遗物实测图(1)(1/3)



第11図 SC 010(2)・032出土遺物実測図(26は1/1、他は1/3)

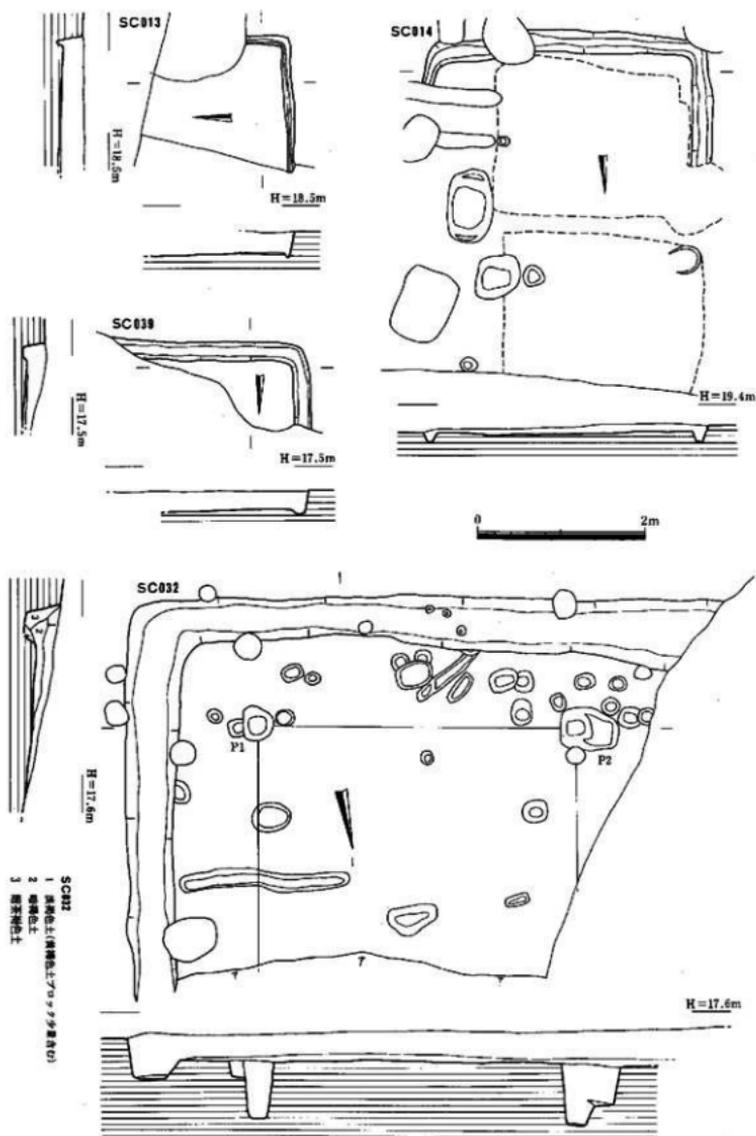
側および東側の壁溝が「L」字状に遺存する。また、SC 005に切られるため、東側壁溝の北半部は005の床面で確認した。壁溝は現況で幅25～30cm、深さ約15cmを測る。なお、支柱穴は不明である。

出土遺物(第8図8) 弥生上器壺の底部である。やや不安定な平底で、体部は直線的に延びる。器面の風化により調整は不明である。SC 006の底部に比して丸味が弱く、弥生時代後期中頃の古い段階に位置付けられよう。他に弥生土器の細片が少量出土している。

SC 008(第7図) A・B-8区で検出した。SC 006に大半を切られるが、南東隅の壁溝が僅かに遺存しており、方形プランの竪穴住居と考えられる。なお、SC 007との前後関係は不明瞭である。壁溝は幅、深さ共に15cmを測り、南側の壁溝沿いには幅60cmの地山作り出しのベッド状遺構が設置される。なお、出土遺物はなかった。

SC 010(第9図) A・B-6・7区で確認した竪穴住居である。北半部は調査区外に位置するが、復元では径約9mを測る大形の円形プランを有する。南側の壁面上位はSD 001に切られている。南東部の壁面は約20cm程度が遺存するが、北西部は削平により壁面が欠失している。また、幅約20～30cm、床面からの深さ約10cmの壁溝が巡るが、北西部は壁面と共に消失しているものと考えられる。現況では壁溝の西側端部は「L」字状に外方に折れる。壁面沿いには幅約50～90cm、高さ約10cmを測る地山作り出しのベッド状遺構が設置されるが、南東部では断続し、西半部は削平を受けている。また、ベッド状遺構下には断続的に幅約30～40cm、深さ約10cmの溝が確認できた。支柱穴としてはP1～P4およびP11～P15が想定でき、建替えによるものと考えられる。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、径20～70cm、深さ30～50cmを測る。なお、貼床は施されない。

出土遺物(第10図・第11図23～26) 南西部の床面上では比較的遺物が集中して出土した。岡化した遺物も第10図18(上層出土)を除き、該地で出土したものである。上器はいずれも弥生土器で、器面の風化が進んでいる。9～13は甕である。9は逆「L」字状の口縁部を呈し、内唇部は内側に張り出す。口縁下には断面三角形の突帯を貼付する。復元口径は40.2cmを測る。10は「く」字状の口縁部で、内面の屈曲は緩い。9同様に断面三角形の突帯が巡る。復元口径は37.8cmである。11も「く」字状の口縁を呈するが、屈曲部には緩い稜を有し、口縁部内面は僅かに窪む。口縁下の三角突帯は低い。復元口径は38.6cmを測る。12・13は平底の底部で、内湾気味に立ち上がる。14～17は壺である。14は複合口縁壺で、口縁部の屈曲部には緩い稜線を有する。口径7.2cm、器高16.4cmを測り、胴部は扁球形を呈する。底部から胴部へは直線的に立ち上がる。15・16は口縁部の屈曲が緩く、袋状の口縁をなす。16は口縁下に断面三角形の低い突帯を貼付し、赤色顔料が遺存する。17は底部で、外面には縦方向の刷毛目が僅かに残る。内面には指オサエを加える。18は筒形器台の胴部と考えられる。その径は25.6cmを測る。19・20は高坏の脚部で、共に内面にはシボリ痕が認められる。21は復元底



第12図 SC 013・014・032・039実測図(1/60)

径9.4cmを測る器台である。22は蓋で、低いつまみを有する。23・24はミニチュアの鉢で、体部は直線的に開く。25は杓子形土製品で、柄部を欠失する。内面には粗いナデを加える。26は定形の碧玉製管玉で、長さ0.83cm、径0.32cm、孔径0.16cmを測る。他に黒曜石剥片が少量出土した。以上の出土遺物から弥生時代後期前半の遺構と考えられる。

SC 013(第12図) A-6区に位置する方形プランの堅穴住居である。北側は調査区外に延び、西側は攪乱されるため、南東隅のみが遺存している。SK 155に切られる。壁面の高さは約30cmを測り、幅10cm弱で、床面からの深さ約5cmの先尖りの壁溝が巡る。床面において柱穴は確認できなかった。出土遺物には弥生土器と思われる細片が少量ある。

SC 014(第12図) A・B-7区で検出した。方形プランを呈するが、北側を大きく攪乱され、空容は不明である。また、東側はSC 006に切られる。南側および東西の壁面の一部が遺存し、東西長は3.4mを測る。幅15～25cm、床面からの深さ約10cmの壁溝を設ける。壁溝から弥生土器の細片が数点出土した。

SC 032(第12図) 調査区北西側のA-2・3区で確認した方形堅穴住居である。谷部の緩斜面上に位置し、西側および北側は調査区外に延びる。南側の壁面は約20～30cmが遺存するが、北側は床面にまで削平が及ぶ。床面からの深さ約20cmで、幅50～80cmの幅広の壁溝が巡る。支柱穴はP1、P2を含む4本と推定される。P1は径約40cmの円形、P2は隅丸のやや不整な方形を呈し、共に深さは約70cmを測る。その柱間は3.8mである。

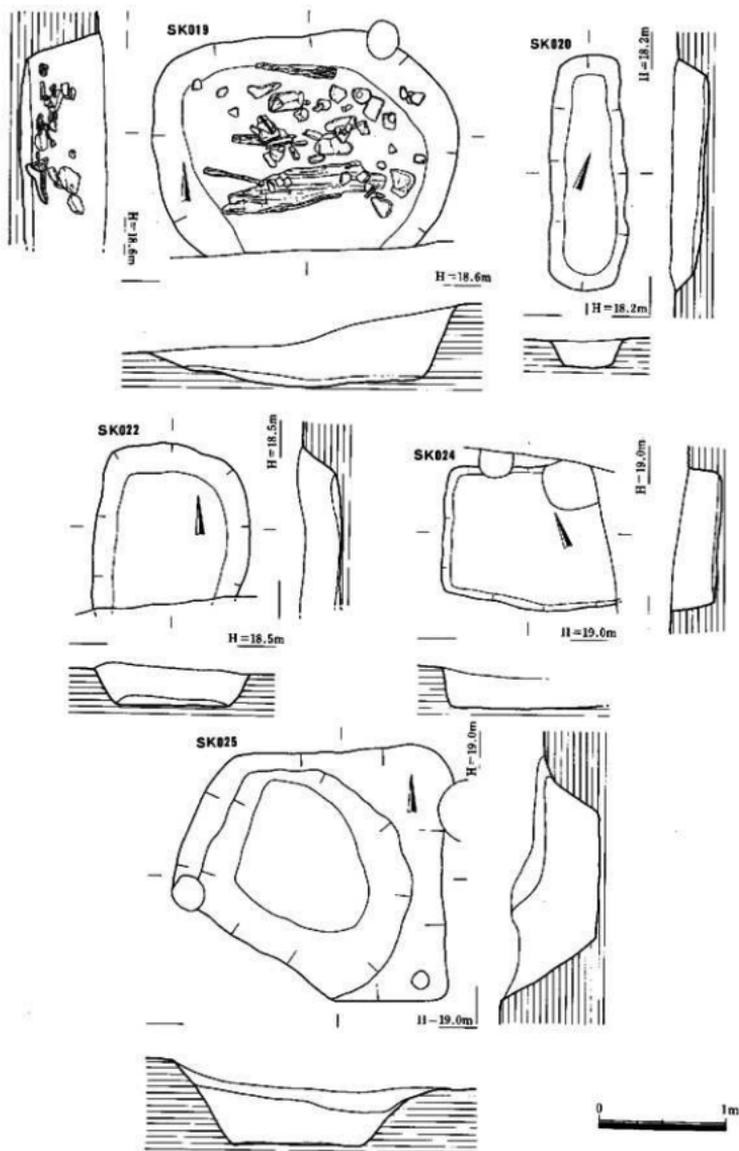
出土遺物(第11図27) 有蓋高坏の蓋で、やや丸味のある天井部には中央部の窪んだつまみを付し、口縁部との境界には稜を有する。天井部の約1/2を回転ヘラ削りし、他はヨコナデを施す。口縁部は鈍い凹面をなす。口径12.3cm、器高5.1cmを測る。壁溝から出土した。他に土師器、須恵器の細片が少量出土している。5世紀末の遺構と考えられる。

SC 039(第12図) A-4区で検出した方形プランの堅穴住居で、調査区の西側の北端に位置する。遺構の大半は調査区際の段落ちに削平され、南西隅を僅かに検出したにとどまる。幅約20cm、床面からの深さ10cm弱の壁溝を設ける。床面では柱穴を確認できなかった。覆土は暗褐色土で、出土遺物は弥生土器と思われる細片少量と滑石片1点である。

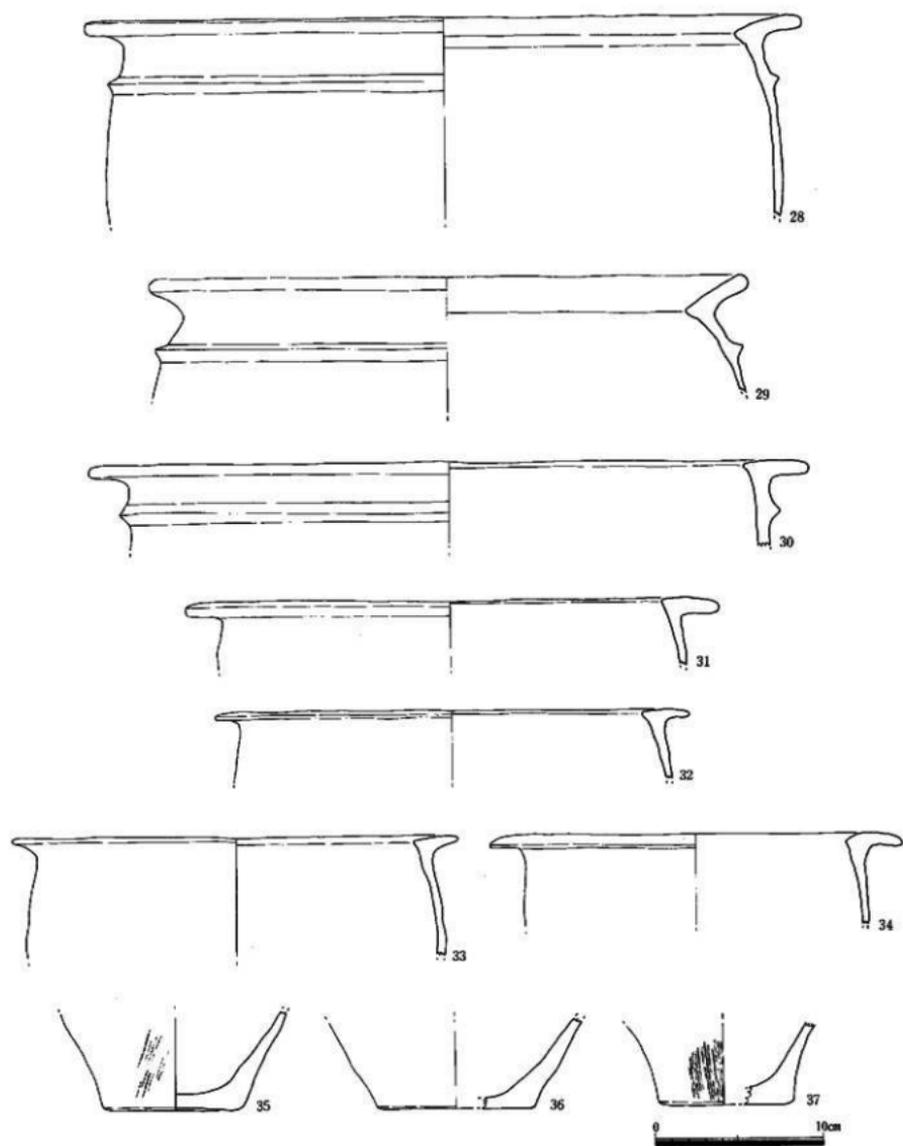
3) 土坑(SK)

SK 019(第13図) B-3区に位置するやや不整な隅丸長方形の土坑である。南側は攪乱され、西側の壁面はSK 022に切られる。幅1.7mが遺存し、長さ2.4m、深さ0.6mで断面は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。上層では弥生土器細片が少量出土したのみであったが、下層では炭化した自然木、糠に混じり、比較的大きな弥生土器片が確認できた。覆土は茶褐色土を主体とする。

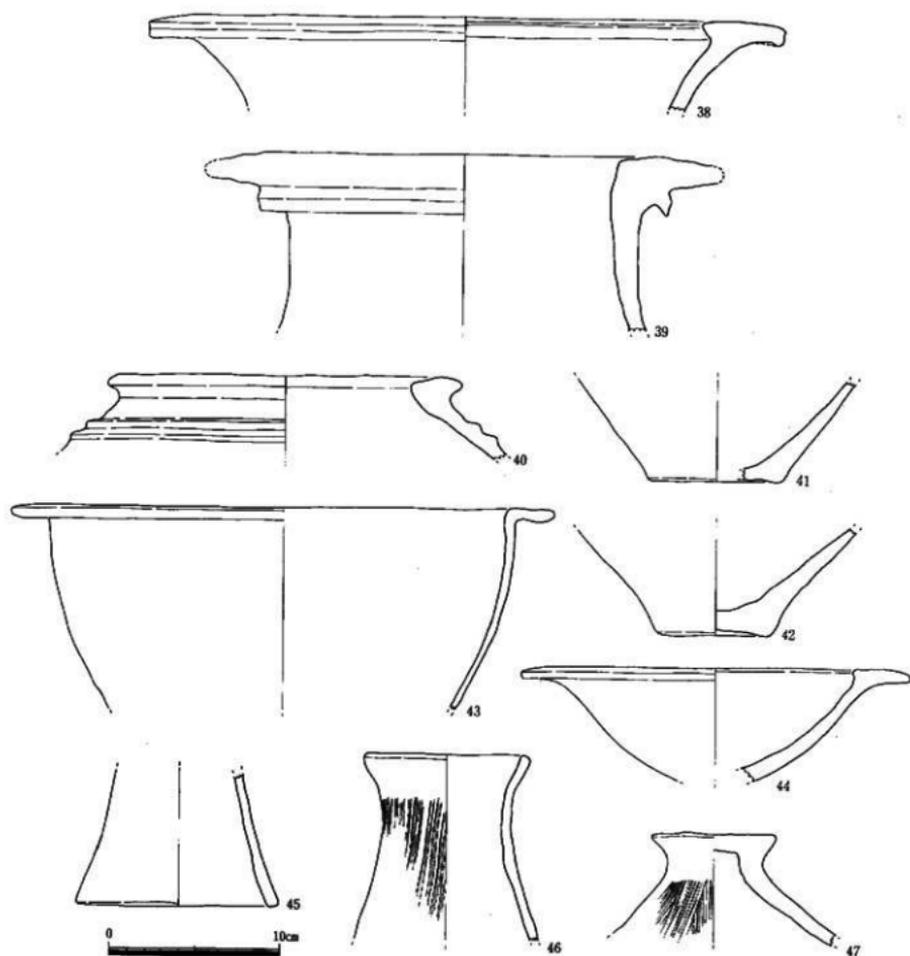
出土遺物(第14・15・16図) 28～47は弥生土器である。器面の風化が進行し、調整が不明な個体が大半を占める。器面が剥落するものも多い。28～37は甕である。28・29は内傾する逆「L」字状の口縁部を有し、口縁下には断面三角形の突帯が巡る。28は内唇部が鈍く突出する。29は内傾度が強く、胴部が強く張る。30～34も逆「L」字状の口縁部であるが、上りは水平に近い。30は口縁下に断面三角形の突帯を貼付する。35～37は底部で、35は外面に縦方向の刷毛目だけが僅かに残る。38～42は甕である。38は鋤形の口縁部を有する広口の甕である。39は特異な器形で、逆「L」字状の口縁部にやや開き気味の頸部が付く。その境界には垂下する幅広の突帯を巡らせている。40は無頸甕で、口縁からやや下った胴部に断面三角形の低い突帯を2条貼付する。外面には部分的ではあるが、赤色顔料が遺存する。41・42は底部で、41は精良な胎土を用いている。43は鉢である。上面の水平な逆「L」字状の口縁部を有する。44は高坏の坏部で、鋤形の口縁部に丸味のある体部を有する。内唇部



第13图 SK 019·020·022·024·025 穴测网(L/40)



第14图 SK 019 出土物实测图(1)(1/3)



第15図 SK 019出土遺物実測図(2)(1/3)

の張り出しは鈍い。内面には僅かに赤色顔料が観察できる。45・46は器台である。45の上半には刷毛目が残る。47は甕の臺である。天井部には断面逆台形状のつまみを有し、外面には刷毛目を施す。48は玄武岩製の敲石で、折損した蛤刃石斧を調整後に再利用したものと考えられる。49は頁岩製の砥石で、4面を砥面として使用する。両端部は欠失している。以上の出土遺物から弥生時代中期後半～末の遺構と考えられる。

SK 020(第13図) B-4区に位置する隅丸長方形の土坑である。長さ1.9m、幅0.6m、深さ0.25mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。覆上は暗褐色土を主体として黄褐色土のブロックが混入しており、その形態からも土壌腐の可能性がある。

出土遺物(第17図50・51) 50は土師器の碗である。断面方形のやや高い高台を有する。器面の風化が進む。胎土には赤褐色粒子の混入が目立つ。51は黒色土器A類の碗である。高台は低く、断面逆台形を呈する。50同様に器面の風化が著しい。

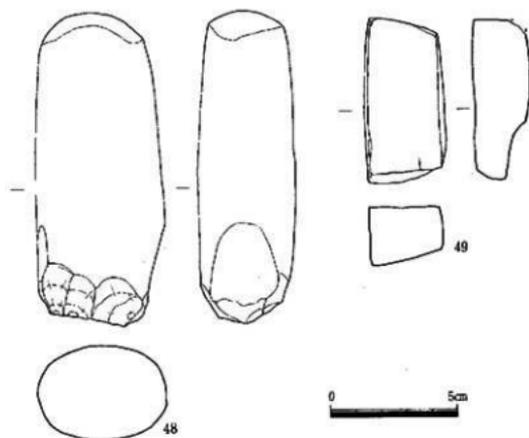
他に須恵器片、緑釉陶器の細片が出土した。以上の出土遺物から10世紀代の土坑と考えられる。

SK 022(第13図) B-3区に位置し、SK 019を切る。また、南側は攪乱される。現状ではやや不整な隅丸長方形を呈するものと考えられ、幅1.2m、深さ0.3m、長さ1.3mが遺存する。断面は逆台形で、底面はほぼ平坦である。灰茶褐色土の覆土で、出土遺物は土師器と思われる細片が少量である。

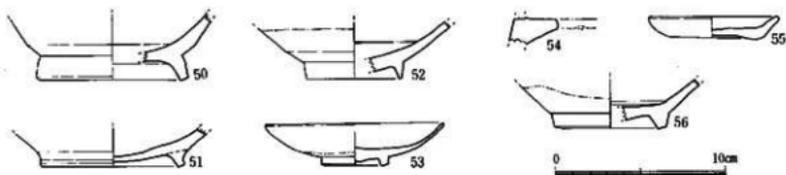
SK 024(第13図) B-2区で検出した方形プランの土坑である。東側は既存埋設管により攪乱される。南北の幅は1.1m、深さは0.35mを測る。平坦な底面から直立気味に壁面が立ち上がる。覆土は花崗岩風化土に灰褐色土のブロックが多量に混じる。土師器片1点、瓦器片2点が出土した。

SK 025(第13図) B-2区に位置し、SK 024に北接するが、現状では重複しない。不整な方形を呈し、長さ2.1m、幅2.0m、深さ0.7mを測る。壁面は上位で傾斜を変え、逆台形状の断面をなす。底面は平坦である。上層は黄茶褐色土、下層はSK 024と類似したブロック混じりの覆土である。

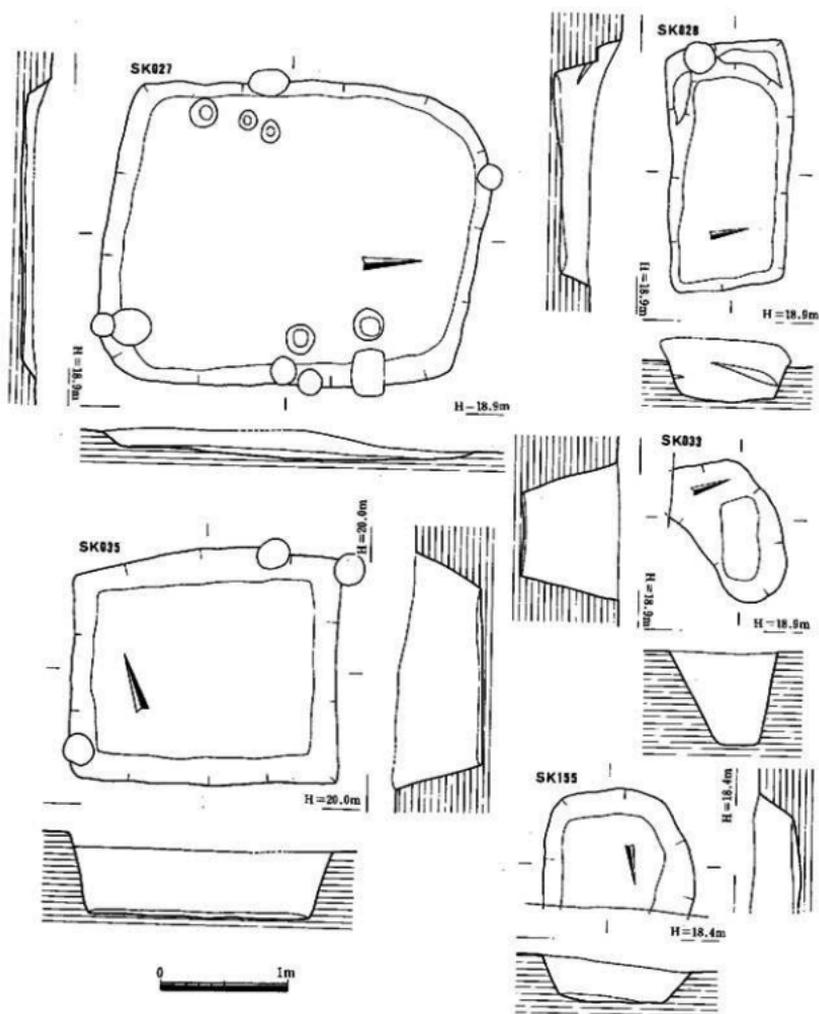
出土遺物(第17図52~54) 52・53は白磁で、52は碗である。直立する細長い高台を有し、見込みには沈線を描く。外面の下半は露胎である。53は高台付皿で、断面方形の低い高台を貼付する。体部は内湾気味に大きく開く。やや青味をおびる白色の釉を施し、細かい貫入が入る。体部の下位から高台は露胎である。字体は不明瞭ながら、外底部には刷書が認められる。口縁部の1/3を欠失する。



第16図 SK 019 出土遺物実測図(3)(1/2)



第17図 SK 020・025・033 出土遺物実測図(1/3)



第18図 SK 027・028・033・035・155実測図(1/40)

54は滑石製石鍋の鈎部で、外面の下端には煤の付着が認められる。他に土師質銅、須恵質土器、瓦質土器、青磁の細片が少量出土している。以上の遺物から15世紀代の遺構と推定される。

SK 027(第18図) B-1・2区で確認した隅丸方形の土坑で、SK 028を切る。長さ3.0m、幅2.4mを測り、深さは0.15mと浅い。覆土は灰褐色土を主体とし、花崗岩風化土が少量混じる。平坦

な底面上では深さ約10～20cmのピットを検出した。出土遺物には土師質土器、瓦質土器摺鉢の細片がある。中世後半の遺構であろう。

SK 028(第18図) B-1区に位置し、SK 027に東側を切られる隅丸長方形の土坑である。長さ2.0m、幅0.95m、深さ0.55mを測り、北西隅には平坦面を有する。壁面は直立気味に立ち上がる。覆土は上層が茶褐色土、下層が花崗岩風化土による埋め土で形態からも土壌墓の可能性を有する。出土遺物には弥生土器の細片が2点ある。

SK 033(第18図) 調査区南西隅のB-1区で確認した不整形な土坑で、南端は調査区外に位置する。東西は1.2m、深さは0.75mを測り、壁面は比較的急な立ち上がりをも有する。覆土はやや茶味のある灰褐色土である。

出土遺物(第17図55・56) 55は完形に近い土師器小皿で、口径7.5cm、器高1.3cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕は認められない。内面は内底部までヨコナデを施す。56は白磁碗で、見込みの釉を輪状にカキ取る。体部外面の下半は露胎である。他に土師質、須恵質の土器片が出土している。土師器の法量から14世紀中頃の遺構と考えられる。

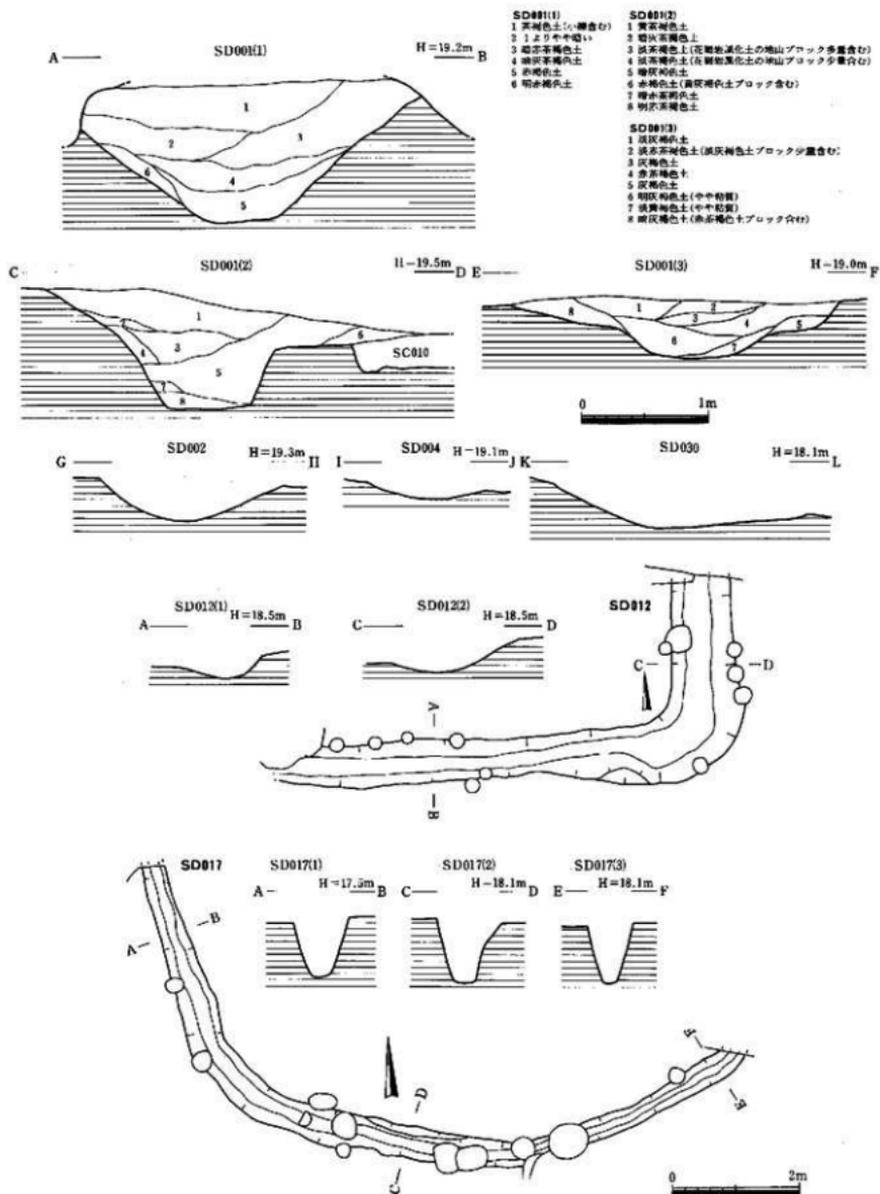
SK 035(第18図) SK 033の北約3m、B-1区で検出した。一辺1.9、2.1mを測り正方形に近い土坑である。壁面は直立気味で、底面は平坦である。覆土は1層のみで花崗岩風化土を人為的に埋め戻している。なお、出土遺物はない。

SK 155(第18図) A-6区の調査区際位置し、SC 013を切る。北側は調査区外に延びる。隅丸長方形を呈するものと考えられ、東西幅1.2m、深さ0.35mを測る。断面は逆台形を呈する。出土遺物には土師器、瓦器、白磁が少量あるがいずれも細片である。

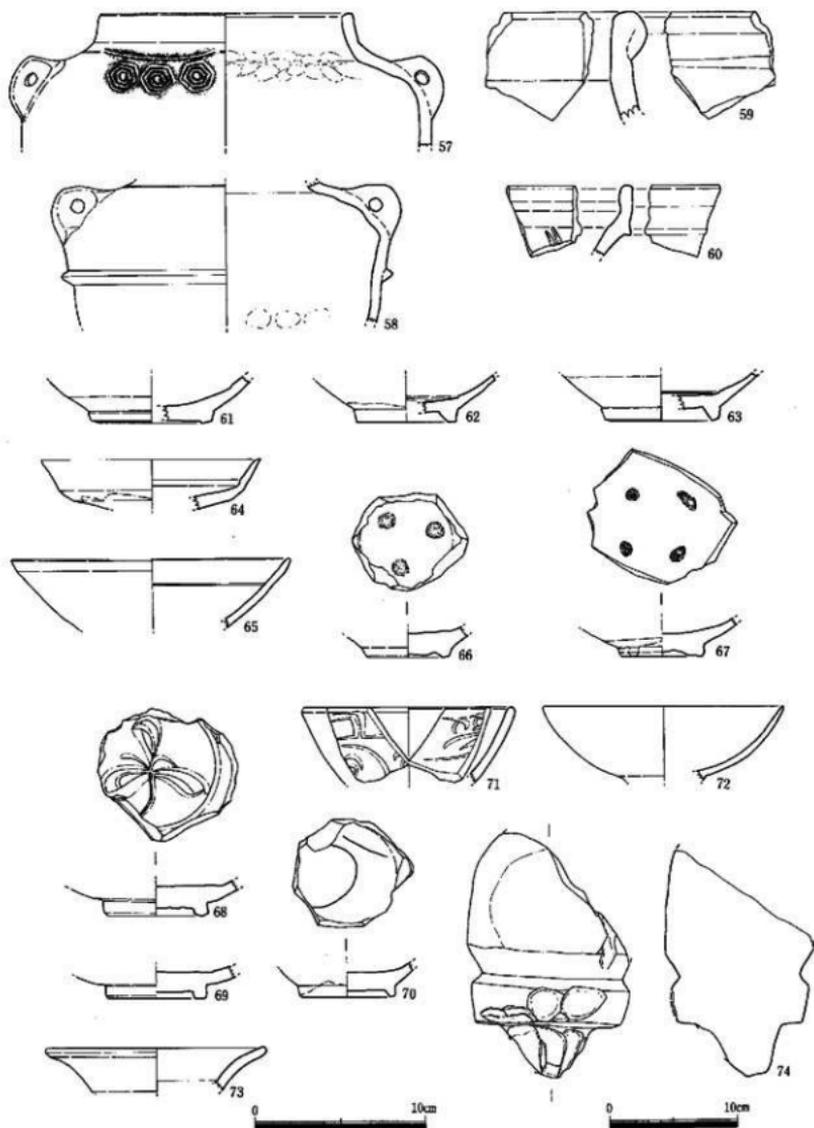
4) 溝(SD)

SD 001(第19図・付図) A-5、B-5～10区で検出した「L」字形の溝で、B-5区に屈曲部がある。B-10区が東端であるが、更に調査区外へと延長する。北端は削平によりA-5区で消失する。現状での総延長は約57mである。B-8区でSD 002と重複するが、攪乱により前後関係は不明確である。なお、検出当初はB-8区以西をSD 002の延長とも考えたが、断面形態が異なることからB-8区以東の延伸として認識した。また、B-6・7区ではSC 010を切っている。東西方向での幅は2.5～3.5mを測り、南北方向では削平により幅1.5m程度となる。土層断面図はB-10区の東端(土層図1)、B-7区のSC 010との重複部(土層図2)およびB-5区(土層図3)で作成した。基本的には断面は逆台形を早するが、北側は肩から一旦緩い傾斜の掘削を行うため、壁面途中に段を有する。東側ほど遺存状況は良好であるが、溝底の標高は西側が高く、東側に緩く傾斜している。出土遺物の取上げの大半は上下の2層に分離して行った。おおよそ上層は土層図1では1～3層、土層図2では1～5層とし、以下を下層とした。なお、土層図3以西は層区分を行っていない。

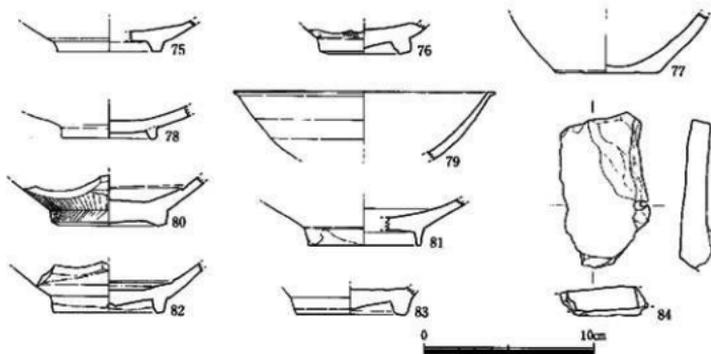
出土遺物(第20図) 57・58は下層出土の瓦質茶釜で、肩には耳を貼付する。57はやや内傾する口縁部を有するもので、外面の肩には沈線が1条巡り、六角文のスタンプが施される。内面には指オサエが残る。58の胴部には断面三角形の低い突帯を貼付する。59・60はIV期に属する備前焼で、共に下層出土である。59は甕の口縁部片で、端部を外面に折り曲げて玉縁状とする。60は摺鉢の口縁部で、直立気味に立ち上がる。描目が僅かに残る。61～64は上層出土の白磁で、61～63は碗底部である。61は幅広の低い高台を有し、体部下半は露胎となる。62・63は見込みの釉を輪状にカキ取る。64は皿で、体部中位で屈曲し、内面には段を有する。体部下半には施釉されない。65～67は李朝磁器で、粗い胎土を用いている。65・66は上層、67は下層出土である。65は碗で、細かい貫入が多い。内面口縁下には沈線が1条巡る。66・67は皿と考えられ、見込みには目跡が残る。外底部は露胎であ



第19図 SD 001・002・004・012・017・030 実測図(SD 012・017の平面図は1/80, 他は1/40)



第20図 S D 001 出土遺物実測図(74は1/4、他は1/3)



第21図 S D 002・017・030 出土遺物実測図(1/3)

る。68～73は青磁で、いずれも上層出土である。73を除いて碗である。68・69は龍泉窯系のもので、高台際まで施釉される。68は見込みに片彫りによる花文を有する。70は見込みに線彫りで施文する。淡青灰色の施釉を行うが、高台内は露胎である。71は内外面に片彫りによる施文を行う。11縁部外面には雷文が巡る。72は淡緑色の透明感のある釉が施される。73は腰折れの皿で、屈曲部から外反して大きく開く。74はB-5区の溝屈曲部で出土した砂岩製五輪塔の風空輪である。空輪と柄部の一部が欠失している。以上の出土遺物より15世紀中頃から後半の溝と考えられる。

S D 002(第19図・付図) A・B-8・9区に位置する東西方向の溝で、東端はA-9区で調査区外へ延びる。また、前述した様に西端はB-8区でS D 001と重複するが、擾乱により前後関係は不明である。幅約1.5m、深さ約0.3mを測り、東側に緩く傾斜している。断面は皿状を呈し、南側壁面は北側壁面に比してやや傾斜が強い。覆土は茶褐色土である。

出土遺物(第21図75・76) 75は李朝磁器と考えられる。灰色の胎土にオリープ灰色の施釉を行うが、高台壘付きおよび内部は露胎である。見込みには目跡が残る。76は同安窯系青磁碗である。外面には細かい櫛目を有し、施釉されない。他に土師質土器、須恵質土器、瓦質土器の細片が出土した。これらの出土遺物から15～16世紀の溝と考えられる。

S D 004(第19図・付図) A-8・9区で検出した東西方向の溝であるが、A-8区で緩く南側に湾曲して、S D 002に切られる。東側への緩い傾斜を有し、東端は調査区外へと延長している。幅0.9m、深さは0.1mと浅い。断面は浅皿状を呈し、覆土は灰茶褐色土である。出土遺物は青磁の細片1点のみである。

S D 012(第19図) A-5・6区で確認した矩形の溝である。北端は調査区外へと延長し、西端は削平により消失している。幅は南北方向では約1m、東西方向ではやや狭く0.6mとなる。深さは約0.2mを測り、断面は浅皿形を呈する。覆土は暗茶褐色土で、出土遺物には土師器、黒色土器A、B類、瓦器等があるが、いずれも細片である。古代末の遺構であろう。

S D 017(第19図) A-5・6区に位置する周溝状の溝であるが、北東および北西は調査区に位置するため、全容は不明である。平面形態は東西方向では弧を描き湾曲するが、南北方向は直線的である。検出当初は堅穴住居の壁溝と考えたが、南北方向では北側への傾斜が著しく、溝底のレベル差が

大きいことからここでは溝状の遺構として報告する。断面は逆台形をなし、壁面の立ち上がりは急である。覆土は暗褐色土を主体とするが、下層では一部に黄褐色土上のブロックが混じる。

出土遺物(第21図77) 弥生土器の壺もしくは甕の底部で、底部から直線的に開く体部を有する。器面の風化が進むが、外面には黒炭が残る。他にも弥生土器が出土しているが、大半が細片である。弥生時代後期初頭～前半の溝であろう。

SD 030(第19図・付図) A-1・2・3区で確認した東西方向の断落ち状の溝である。北側の肩は谷部にかかり、壁面も緩やかである。西側の一部は調査区外にあり、南側の肩のみを確認している。東側は削平のため立ち上がりは検出できなかった。中央部では幅約2m、深さ約0.3mを測る。覆土は茶褐色土を呈する。

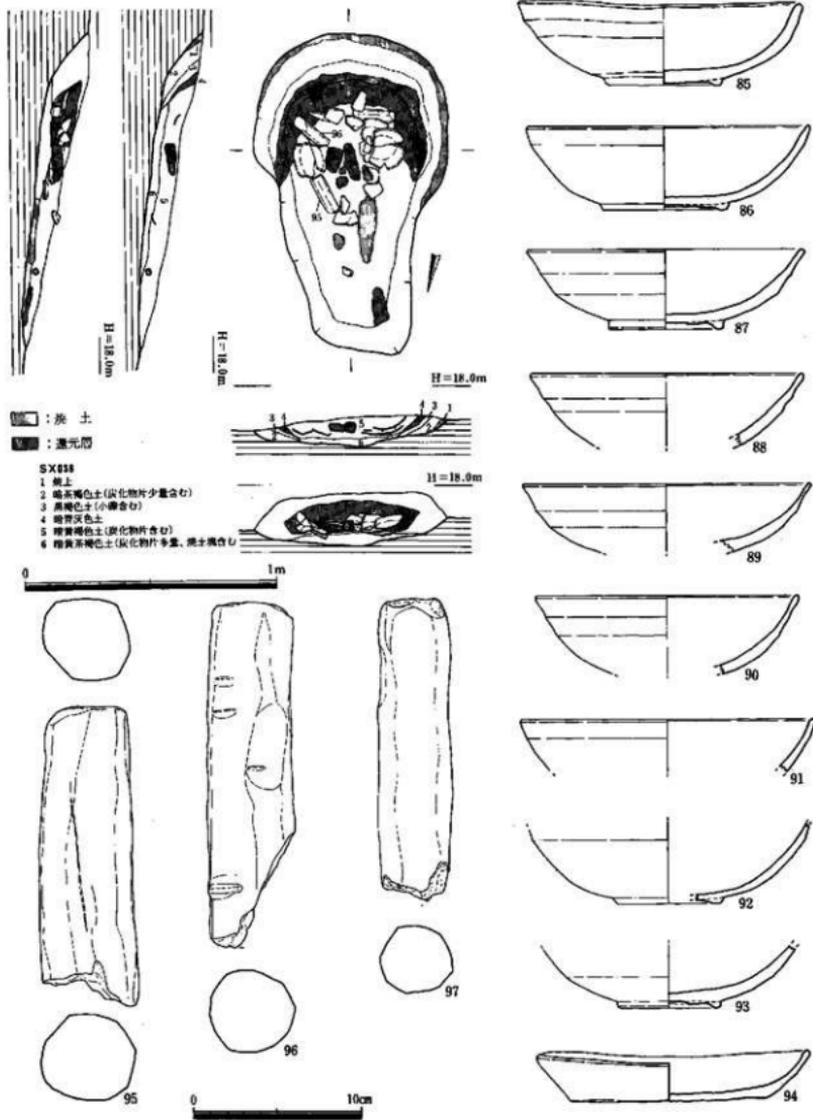
出土遺物(第21図78～84) 78は瓦器碗である。断面方形の低い高台を貼付する。内面はへら研磨、外面はヨコナデを施す。79～83は白磁碗である。79の口縁部端部は短く外反し、水平になる。80は低い高台を有し、体部下半は露胎となる。外面には削り痕跡が明瞭に残る。見込みには段状の沈線が巡る。81は細く直立気味の高台を有するもので、高台際まで施釉される。82・83は見込みの釉を輪状にカキ取る。82はその上位に段を有する。84は滑石裂石鍋の体部下半を再加工した右製品片で、穿孔が1箇所認められる。他に土師器、青磁の細片が出土している。以上から12世紀前半の遺構と考えられる。

SD 040(付図) A-4区で検出した東西方向の溝である。SB 038の柱穴(SP 308)および後述するSP 325に切られ、東端部は擾乱される。幅0.3～0.4m、深さ約0.1mの浅い溝で、暗褐色土の覆土を呈する。出土遺物は弥生土器片数点である。

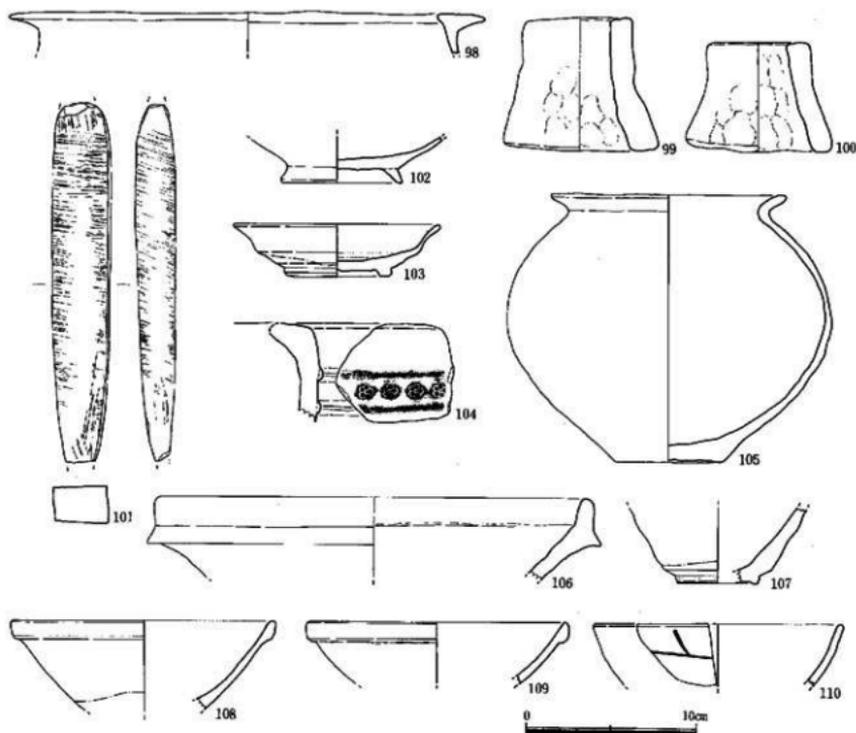
SD 232(付図) 調査区の北西隅のA-1区に位置する南北方向の溝で、幅0.4～0.6m、深さ0.1～0.15mを測る。西側へと緩く湾曲している。北側への傾斜をもちながら、調査区外へと延伸する。土師器および須恵器の細片が少量出土している。

5) その他の遺構(SX)

SX 036(第22図) ここまでの項目中で取り上げなかった遺構SX 036について報告する。A-3区、谷部への落ち際の緩斜面上で検出した。後述する調査所見から瓦器焼成窯と考えられる遺構である。現況での平面プランは柄杓形を呈し、長さ1.25m、最大幅0.75m、深さ0.15mが遺存する。検出時には不整形を呈する南半部には外周から焼土(1層)、暗茶褐色土(2層)、黒褐色土(3層)、暗青灰色の強く被熱した還元層(4層)が帯状に半周する状態で確認された。還元層内部の上層には炭化物片を含む暗黄褐色土(5層)が認められ、南半部の5層下面には瓦器碗9個体、瓦器皿1個体および焼台と推定される棒状の上製品が出土した。還元層の検出状況から閉塞構造上での焼成が看取されることや遺物の出土状況により、丘陵側の不整形を呈する南半部が焼成部、谷側の方形を呈する北半部が焚口および燃焼部であった可能性が高い。上層観察から窯体の構築順序および構造を復元すると、まず谷側に約5°の傾斜をもって掘り込みを行い、その後、南壁面に認められる焼土(1層)から除湿のための燃焼(空焚き)を行っているものと考えられる。その上で、2～4層を南半部壁面および上部を含めて窯体壁面を構築している。従来、3・4層は同一層であり、被熱した焼成部が4層の還元層として認識し得たものと考えられる。壁面は現況の推定では直立気味に立ち上がり、天井部に連なるものと推定される。5層中には還元したブロックが含まれており、天井部の構築物が崩落したことを示すものであろう。また、6層の南側は還元されていないことから、保熱あるいは除湿目的のため焼成前に窯体底面に敷いたものと思われるが、炭化物や焼土塊を多量に含むことから、壁面が還元される長時間操業前の焼成時堆積土とも考えられる。なお、遺物は大半の製品が内面を上にして破損した状



第22図 SX 036 実測図(1/20) および出土遺物実測図(1/3)



第23図 ビット・検出面出土遺物実測図(1/3)

態で出土している。また、重なった状況も看取されることから、焼台の上に外底部を乗せて重ね焼したものと推定される。また、この窯は破損状況や後述する遺物焼成状態から焼成途中で天井部が崩落し、廃棄されたものと考えられる。

出土遺物(第22図85～97) 85～93は瓦器輪である。器面の風化が著しく、一部ヨコナデが観察できる程度である。断面台形状の低い高台を付しており、体部は丸味を有して大きく広がる。細片復元の90を除いては口径16.2～17.2cm、器高4.9～5.2cmとまとまりがある。86・87・89・92は焼成がやや不良で、炭素が十分に吸着していない。94は瓦器皿で、口径16.0cm、器高3.1cm、底径11.7cmを測る。碗同様に器面の風化が進んでおり、調整は不明である。95～97は焼台と考えられる棒状の土製品で、瓦器製品同様の焼成を示すが、胎土には砂粒が多く含まれる。順に長さは18.0、20.8、18.2cm、最大径は5.8、5.2、4.4cmで、97はやや細身である。いずれも鈍く面取りを行っている。95・97は両端部共によく焼成されており、焼成前に折り取った上で、焼台として使用している。なお、現状では各個体は接合しない。なお、この遺構は出土した瓦器より12世紀代のものと考えられる。

6) その他の遺物(第23図)

ここではビット出土および遺構検出時に出土した遺物を取りまとめて報告する。

98～105はビット出土の遺物である。98～100はA-8区のSP106から出土した弥生土器である。98は逆「L」字状の口縁部を呈する甕で、内唇部が鈍く突出する。内外面共に器面が風化する。99・100は裾部が開く支脚で、内外面に指オサエが残る。101はA-7区、SC010内のSP129から出土した粘板岩製の砥石で、残存長21.4cmを測る。両端部は欠損する。4面に細かい擦過痕が認められる。102はA-5区のSP170出土の瓦器碗で、器面の大半が剥落する。やや高めの高台が付く。103はB-2区のSP218から出土した青磁高台付皿で、体部の中位で腰折れし、口縁部は端反りする。淡緑色の釉を施すが、体部下半以下は露胎となる。また、見込みの釉は輪状にカキ取る。104はA-1区のSP228出土の瓦質土器火舎で、口縁部は内側に折れる。外面には断面台形状の低い突帯が巡り、その間には梅花文のスタンプを施す。105はA-4区、SP325出土の弥生土器無頸壺である。SD040を切っている。口縁部は「く」字状に短く折れる。外面の下半には赤色顔料が遺存する。

106～110は検出面出土の遺物である。106は備前焼の播鉢で、自然釉の付着が認められる。107は黒釉施釉の天日碗で、茶褐色の化粧土を施す。108・109は玉縁口縁の白磁碗である。110は青磁碗で、外面には片彫りによる施文を有する。

IV. 結 語

今回の調査で確認した遺構はI期(弥生時代)、II期(古墳時代)、III期(古代)、IV期(中世)の4期に大別できる。以下時期ごとに遺構変遷を述べると共に周辺調査区との対比および関連付けを行いたい。
<I期>

本調査区内での最古期の遺構として弥生時代中期末に位置付けられるSK019がある。出土土器の形態は後述するSC010と類似するが、すべて中期の範疇で把握し得る遺物群である。該期において本文丘尾根上では墓棺墓および土墳墓で構成される墓地が展開しており、祭祀関係の土坑とも考えられるが、精製の器種に乏しい。続く後期初頭には調査区東側に円形のSC010 堅穴住居が認められる。第10図14の壺は短い頸部と屈曲部に鈍い稜を有する口縁部から後期初頭の複合口縁壺として考えた。旧地形図(第3図)に拠ると、堅穴住居が分布する調査区の北側には広い緩斜面が広がり、数軒が単位となって集落が展開していたものと考えられる。調査区の南側は尾根頂部からの急斜面が形成されており、地形的にも集落の南端部に該当するものであろう。その後の後期中頃の堅穴住居は平面プランが方形に変化を遂げ、SC006・007・008・014が重複した位置に営まれている。SC006は2本柱で構成される主柱穴を有し、床面中央に炉を配する。いずれも遺存状況が良好でなく、出土遺物は少量であるが、SC006出土のレンズ状の底部はSC007に比して丸底化がすすんでおり、1時期程度後出する住居と考えられる。重複関係からこれらの住居群は後期前半から中頃に連続して営まれたものと推定される。また、谷部の東側緩斜面で検出した弧状を呈するSD017溝は底面のレベル差があり、壁溝として考えるよりむしろ調査区外の緩斜面上の堅穴住居から延びる排水溝とした方が妥当であろう。後期初頭から前半に比定され、前述の集落の一端と考えられる。本遺跡内での堅穴住居が同一の立地条件の中で、後期初頭から前半にかけて円形プランから方形プラン2本柱へと移行することを確認し得たことは貴重な成果である。また、この緩斜面が面する北側谷開口部の沖積地では下月隈B遺跡群第3次調査が実施され、中期末から後期初頭の井戸が確認されている。丘陵斜面上に集落を経営する集団が付近の沖積地において水資源を求めたことは想像に難くない。また、同時に出土し

た石廂丁は狭隘な谷部を水田経営の基盤としたことを示している。この月隈丘陵での該期の集落は久保園遺跡、中尾遺跡をはじめとして数地点で検出されている。久保園遺跡は月隈丘陵から大きく西側に派生する小丘陵の南側緩斜面に位置する遺跡で、該期には4軒の堅穴住居と1軒の掘立柱建物が確認されている。S C 010 とほぼ併行する時期と考えられる3号堅穴住居は方形プラン2本主柱で、本遺跡よりやや先行する時期に方形堅穴住居を採用する。また、中期後半に出現する5間×8間の掘立柱建物は該地での拠点的功能を果していたものと想定され、また、有力者層の存在を示唆するものである。これらは月隈丘陵支尾根上に造営される中期から後期の墓地に、銅剣を副葬する中期後半の上月隈遺跡群第3次調査の甕棺墓や、やや遅れて後期前半に鏡が副葬される宝満尾遺跡の土壇墓が存在することと無関係ではあるまい。

<Ⅰ期>

該期には5世紀末のS C 032 堅穴住居が1軒単独で検出されたのみで、土坑およびピットについては認められない。第3次調査でも尾根上に小規模な古墳時代の堅穴住居が1軒確認されている。また、中尾遺跡における6世紀後半の堅穴住居も単独で占地し、いずれも単発的な感がある。集落規模の縮小によるものか、あるいは丘陵上の古墳築造により集落と墓地との占有が明確に分離されたことを示すものであろう。

<Ⅱ期>

まず、8世紀前半に比定されるS B 038 が挙げられる。北側に浅く開く谷頭に位置し、谷の開口方向に主軸をほぼ磁北方位に有する建物である。現在のところ、1棟が単独で占地するものか、谷部に建物が発見するものかは不明である。また、支尾丘の谷を挟んで北側に位置する下月隈B遺跡群の丘陵端部(第2次調査)ではほぼ同一時期の溝に囲まれる小規模な掘立柱建物が2棟検出されている。なお、該期には丘陵下に広がる福岡空港南側の沖積地で大規模な水田経営が条里制の施行と共に開始されていることが判明しているが(下月隈C遺跡群第2・3次調査)、両者の関係について論ずる材料は未だ少ないのが現状である。また、調査区の東側で検出した竈を有するS C 005 も該期に相当する。S K 020 は本文中でも記した様に、その端正な掘り方の形態から土壇墓の可能性を有する遺構である。前述の建物や堅穴住居に後出する10世紀代の所産である。

<Ⅲ期>

該期の遺構は中世前半の12世紀代、中世後半の15～16世紀に細分される。前者に該当する遺構としてはS D 030、S X 036 が挙げられる。S D 030 は調査区際に位置するため、全容が知れないが、12世紀前半の白磁が出土している。掘立柱建物としてまとめきれなかった柱穴が多数あり、それら集落と関連する溝と考えておきたい。また、出土遺物がなく土坑も多く明確な時期比定は困難であるが、小規模な集落が発展していたものと考えられる。S X 036 は本文中で詳述した様に瓦器焼成窯である。これまでの検出例の稀少さは本例が示す様に小規模で簡易な窯下部構造に起因するものと思われる。本文中で復元した構造であれば、集落内においても居住区と一定距離を保ち、火気に細心の注意を払うことにより瓦器焼成が可能であると思われる。焼成窯は今回の単独検出例から複数回の操業はなされたにせよ、継続した窯体の管理や運営が行われず、単発的な操業であったことが推測される。

中世後半には大規模な溝S D 001 が巡る。現況からは北側緩斜面を囲むものと考えられるが、調査区内では溝内部の遺構は未検出である。丘陵尾根での本遺跡群第3次調査では山城の掘切と考えられる溝が確認されており、S D 001 は里城的な性格を有する館を圍繞するものと想定される。

図 版



調査作業風景



(1)調査区全景(西から)



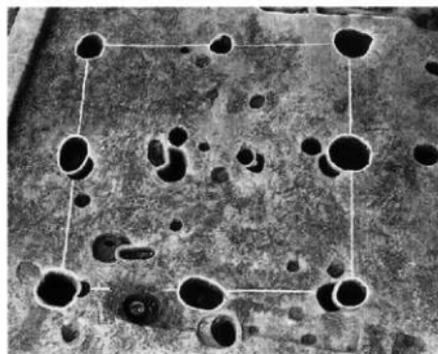
(2)調査区東半部全景(西から)



(1)調査区西半部全景(東から)



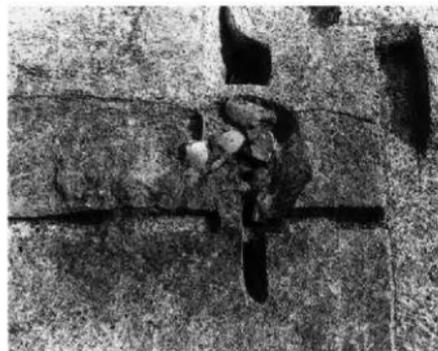
(2)調査区西端部全景(東から)



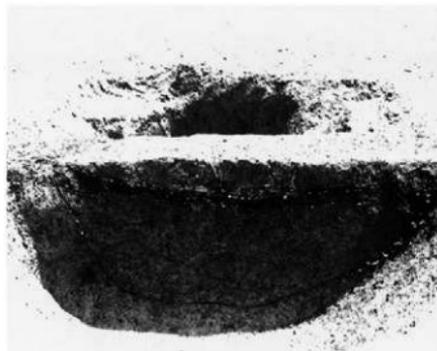
(1) S B 038(南から)



(2) S C 005・006・007・008(南から)



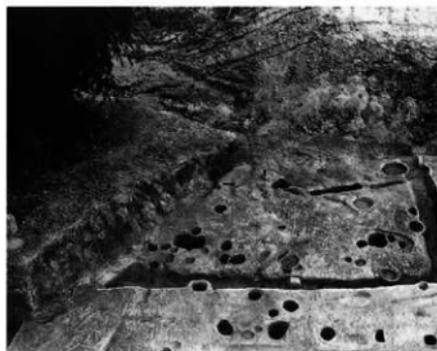
(3) S C 005 カマド検出状況(北から)



(4) S C 006 - P 3 土層(西から)



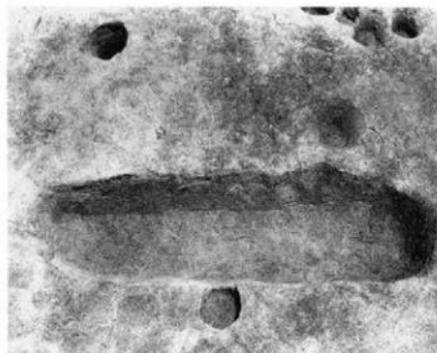
(5) S C 010(南から)



(6) S C 032(南から)



(1) S K 019 (西から)



(2) S K 020 (西から)



(3) S K 035 (東から)



(4) S D 001 土層(1) (西から)



(5) S D 001 土層(2) (東から)



(6) S X 036 (北から)

かみつきぐま

上月隈遺跡群 2

—第2次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第633集

2000（平成12）年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 高松印刷有限会社

福岡市東区松島1丁目4-10
